いざ！リオ五輪 Vamos Rio

第２部　「この技」で勝つ

■■1

サーブ強化 「心」も磨く

バレー女子

サーブの順が回ってきたのは、セッターの宮下遥（岡山シーガルズ）だった。昨年のワールドカップ（W杯）で、個人5位となるサービスエース15本を決めた名手だ。

バレーボール女子のリオデジャネイロ五輪世界最終予選兼アジア予選。2勝1敗で迎えた5月18日のタイ戦は、最終セット（15点制）で最大6点差を追う窮地にあった。

「やるしかない一心で打ち続けた」と21歳の司令塔。9―12からほうり込んだサーブは、相手コートの奥深くにぽとりと落ちた。流れを手にした日本は、さらに宮下の好サーブから得点を連取し、逆転で試合を制している。この白星がものをいい、4大会連続の五輪切符をつかんだ。

「相手にサーブレシーブをきっちりセッターに返されると、70％くらいの確率で決められる。サーブである程度崩さないと勝算はない」と女子監督の真鍋政義。2012年ロンドン五輪で日本を7大会ぶりの銅メダルに導くと、リオ五輪に向け、①サーブ②サーブレシーブ③スパイクレシーブ④ミスの少なさ―の4項目で「世界一」になることを選手に求めた。

中でもサーブは日本の武器だ。5位だった昨年のW杯で決めたサービスエースは90本。優勝した中国の77本を大きく上回るトップの数だった。

サーブを受けた相手選手にセッターの位置まで正確につながれた割合は、全体の32％と全チームで最少。高さとパワーで上回る強豪を、サーブで幻惑する展開を日本は確立させた。

公式球の特性研究

公式球の特性を研究したのも、日本ならではの対応といえる。08年北京五輪から、バレーの魅力である長いラリーを増やすため、パネルを3色から2色に減らして回転を見やすくした公式球「MVA200」が採用された。表面には汗でぬれても滑りにくくなるディンプル（くぼみ）加工が施され、軌道のブレも抑制されるようになった。この新公式球をどうやって味方につけるか。

サーブ担当コーチの大久保茂和を中心に本格的な強化が始まった。分析の結果、女子のパワーだと時速72キロで一番変化することが判明。この球速を維持しながら、狙ったところに打つ技術を磨いた。動作解析を専門とする崇城大准教授で男子代表コーチ、増村雅尚の協力を仰ぎ、ハイスピードカメラも取り入れて理想のフォームを追求。対戦相手のデータ分析にも力を入れ、「この選手なら左側を狙え」といった明確な指示も出すようになった。

攻撃姿勢植え付け

最も力を入れたのは精神面の強化。大久保は「サーブでチームにどう貢献したいか」というアンケートを通じて、選手に攻撃的な姿勢を植え付けた。当初は「無難」を求める傾向の強かった宮下が「ミスってもいい」と書くようになり、いまでは大きな武器になっている。

ただ五輪最終予選で、日本の1セット当たりのサービスエースの数はW杯からほぼ半減した。苦労したタイ戦では、最終セットに宮下が決めるまで、エースは一本もなかった。手前に落とすサーブに備えてレシーバーを前の方に配置するなど、相手に対策を練られた影響も大きい。

「研究されたのは確か。だからどうしようもない、ではいけない」と大久保。五輪本番に向けて、改良の余地は多く残されている。

（奥村信哉）

◇

日本の選手は外国勢に比べて体格やパワーで劣るといわれる。その差を埋めるものがあるとすれば、日本ならではの繊細な技だろう。第2部では日本が誇る逸品の「この技」に光を当てる。

タイ戦で、サーブを放つ木村。日本にとって試合の鍵を握る重要な要素がサーブだ
―5月18日、東京体育館（森田達也撮影）

敬称略

Copyright © The Sankei Shimbun. All rights reserved.掲載記事、写真の無断転載を禁じます。